

## 支援室職員の独り言

加藤祥治

数理工質科学等支援室人事担当専門職員

### 強力な指導者の下で

私は、法人化後、数理工質科学等支援室で2人の研究科長に仕え、そのどちらの研究科長からも多くのことを学んだ。どちらの研究科長も組織を維持し拡張するために適度なブラフと適度な妥協を使い分けていた。その強力な個性と指導力は、誰もが目を見張り感嘆するに違いない。先の研究科長は、絶対的な指導力を発揮し、忌憚なく意見を述べることで会議上で組織にとって有理な様々な言質を引き出していた。その様を見ていると組織を運営する者は、このようでなければならないという姿勢を示してくれていた。また、私にとって2人目の研究科長は、特に発想の柔軟さと行動力に驚かされ、柔軟に思考するということの大切さを学ばせていただいた。私は、この研究科長と仕事をしながらいつも思うことがあるが、それは案が出された時、反対する者は明確な理由と代案を示して反対しなけれ

ばならないということである。自分の意見がなくただ反対する者は、卑怯者以外のなものでもなく、そういう者に付き合うということは、その発言の内容がおおよそ愚痴であるため、付き合っている時間は大きさに言えば人生の無駄である。研究科長の姿勢からそのことを学び、そうありたいと、私は事務を執っている。法人化後、私は支援室がこのような研究科長の指導力のもとによくまとまっていると思っている。しかし、大学全体となると疑問符を打つことになる。

法人化後、学長の指導力が強化されたはずであるが、なかなか大学の運営に関することが決まっていこない。それは、支援室、つまり現場にいる者にとっては、仕事をすの上でとても不安で仕方がないことである。教員にとっても同じことが言える。

## 大学における改変の意義

以前、法人化直後に支援室職員と執行部教員との懇談会が持たれたことがある。法人化後は、自由な発想で業務改善等に一人一人が真剣に向かい合って欲しいという内容の講義が主であった。その講義の終了後、意見交換の時間がもたれ、筑波大学はどこに向い、また全国の大学のどの位置を目指そうとしているのかという内容で私は質問したことがある。それに対する明確な回答を得ることは無かったが、その代わりとして、筑波大学は他大学とは違いフレキシブルに組織を改変できる、そしてそこが筑波大学の強みであり、強調できることだというような内容を言われたことがあった。私としては釈然とせず、今でも何か違うような気がしてならない。政治などでお馴染みのガラガラポンは、やはり大学には相応しくないように思われる。教育に責任を持ちコアな部分については、固執すべきであると私は信じる。

これまでの十数年に亘る初等中等教育の文部科学省の失策の責任を大学はとるべきであると考えている。一人前の社会人を送り出す最後の砦なのだから、学生に迎合することなく、しっかりと鍛えなければならないのだと思う。今後、教育制度が元通りになるとしても、さらに10年の月日が必要であり、その間、既に社会に送り出されている

社会人が働き盛りであることを考慮にいと、この後の2・30年は日本の文化や経済が浮かび上がることはないように思える。だからこそ教育の根幹に関わる部分については、変更してはならないのではないだろうか。また、そのサポート関係にしても十二分に注意をしなければならないのだと思う。

現在、学生のためだといって組織改変が急速に行われているが、本当にそれでいいのだろうか。時々疑問に思うことがある。何かというと学生のためと組織を改変しているが、学生にとって本当にそうなのだろうか。事務の所掌の話一つを取ってもそうなのだ。学生にとって事務室が何処になろうとも本当は問題にはならないのである。学生の便を本気で考えるならば学生支援センターの在り方と充実を図るべきである。そこへ行けば、学生の用務の殆どが事足りるというようにしなければならない。筑波大学の組織の改変については、切り抜いたパーツを何処につけるかということだけに捕らわれていて、抜本的な改変にはならず、常にプラス・マイナスでゼロである。むしろこの改変のための労力と費用を考えると必ずマイナスになる。本当に学生のことを考えた上での組織変革なのだろうか、疑わしいものである。

## 気がかりなこと

また、私は長く筑波大学に勤めていて気になることがある。それは、学生や教員が事務室を訪ねてこないということである。確かに中途半端な位置に支援室があることも原因であろうが、そうとばかりは言えない。私は某大学で教務係の経験があるが、当時は学生や先生が旅行に行ってきたとお土産を持って訪ねてきてくれたりしたものだ。また、卒業の時などは学生から飲み会に誘われたものである。今の筑波大学では皆無とも思える。多分、忙しいからということを理由にするのだろうか、私にすればその時の方がもっと仕事は忙しかったように思える。筑波大学の方が人もいて、余裕があるように思える。実は人員的にこれほど恵まれている大学は数少ないのである。一人一人の対応の仕方が何か違っているのではないだろうか。このことが学生を遠ざけ、教員を遠ざけているのであると私は思う。私もその支援室の一員なのだが。

今の大学では人材育成もしないし、する余裕もない。規則や処理の仕方を知らない者がなんとなく業務をこなしている。企業は人なりという言葉を少し前までよく聞いたが、人を大事にしない企業は、倒産の憂き目に必ず会う。大事にしていないから人が育たない、人が育たないから仕事がわからないということになる。仕事が分からな

いから対応が粗末になり、教員や学生を遠ざけてしまうのである。

## 最後に

筑波大学は法人化を意識し過ぎるのではないかと思うことがある。大学の業務は教育と研究であり、事務はそれを支援するだけのものである。本来はこれまでと何ら変わらないのだが、なぜかあたふたとしてしまっている。

法人化とは、文部科学省の予算付けのために説明責任を果たす目的に導入したシステムに他ならない。評価を入れることで配分した予算に理由付けして正当化しているにすぎない。筑波大学は、他大学に類を見ないノーベル賞受賞者を輩出した機関である。法人化に伴って奇を衒うことなく、筑波大学が筑波大学であることに自信をもって、大学の存在を確立して欲しいと思う。

現在、少子化による大学全入学の時代が2年も前倒しになり、今年からそのような状態になるという。受験生は、ひと時は資格のとれる専門学校の延長としての学校選びをしていたようだが、最近の傾向はブランド志向に傾いてきているようである。私は、法人化後の筑波大学はより筑波大学ブランドを強化する方向に舵を切らなければ、単なる地方の一大学になってしまうような

気がしてならない。筑波大学が我が道を行くというくらいに自信と矜持を持ち続けてもらいたいとともに、そういう戦略と戦術で運営して欲しいと切望する。良い教育や研究を行っていれば、社会に輩出する学生の質が自ずと大学の評価を高め、大学の地位を確立するのだと思う。それによって淘汰されることはなく、むしろ世界を相手に戦える大学となるのだと思う。また、筑波大学に勤務する一職員としてそうなって欲しいと願ってやまない。

(かとう しょうじ)